明石の史跡（３６）景勝の変化

文治元年（１１８５）８月２４日、源範頼にしたがって、平家追討に功績のあった下河辺行平は、頼朝よりの恩賞の意思表示にたいし、明石等の「勝地」がある播磨国守護職を所望し、頂戴に及んでいる（吾妻鏡）。「勝地」とは、「けしきのよい土地。名勝。名所。」（広辞苑）をさす。彼は、山陽道を西下して、鎮西にいたっており、各所の風景を目にしてきたにもかかわらず、この坂東武者をして、明石を凌ぐほどの場所には遭遇しなかったようである。こうした自然の景色の美しさは、いつごろまで、讃えられたのだろうか。

「播磨名所巡覧図会」をひもとくに、「名所明石浦（郡中海辺の惣名なり）」に続けて、古歌が７首ほど列記されているだけである。それにくらべると、舞子の浜は、「この地古歌なければ、必ず名所といふにはあらず。されども名高き事天下に聞こえたり」とあつて、あまり旗色がよいとはいえない。神社・仏閣の紹介に当てられたスペースにくらべれば、微々たるものである。風景よりも人工的なものに関心が移っている。

アーネスト・サトウが記した『明治日本案内上巻カルチヤー編』（序文は明治１４年２月１日付）によれば、「（神戸より）十二マイル先にある明石（旅宿、大坂屋）はかつて松平兵部大輔という「大名」の城下町であった。城の大半は破壊されたが、その濠と敷地は訪れる価値がある。城を見学する許可は神戸で容易に得られる。明石で最も注目に値する神社は日本の古い詩人人麻呂を祀ったもので、彼は旅の途中で明石の町にその風景をたたえた三十一文字の歌を残した。明石へ足をのばすなら舞子で昼食をとることをお奨めする」（同書９３頁）という。明石の観光の目玉は、人丸神社と明石城跡である。これは今日も変わらない。ただ「舞子で昼食」というフレーズには、食文化への対応の弱さを指摘されたものだろうか。

日本歴史学会会員　茨木　一成